

化銀杏

泉鏡花

青空文庫

貸したる二階は二間にして六畳と四畳半、別に五畳余りの物置ありて、月一円の極きわめなり。家主やぬしは下の中の間の六畳と、奥の五畳との二間に住居すまいて、店は八畳ばかり板の間になりおれども、商あ売きな家いやにあらざれば、昼も一枚しとみ藪しとみをおろして、ここは使わずに打捨うてあり。

往来より突抜けて物置うしろの後の園生そのうまで、土間の通とおり庭にわになりおりて、その半ばに飲井戸あり。井戸に推おし並ならびて勝手あり、横なべに二個ふたつの竈かまどを並べつ。背後うしろに三段ばかり棚を釣なりて、ここに鍋なべ、

釜かま、搦鉢すりばちなど、勝手道具を載のせ置けり。廁かわやは井戸に列してそのあわい遠からず、しかも太いたく濁りたれば、漉こして飲用に供しおれり。建てて数十年を経たる古家なれば、掃除は手綺麗てぎれいに行届きおれども、そこら煤すすぼりて余りあかるからず、すべて少しく陰気にして、加賀金沢の市中にてもこのわたりは浅野川の河畔一帯の湿し地けちなり。

園生は、一重の垣を隔てて、畑造りたる裏町あきちの明地すももに接し、李すももの木、ぐみの木、柿の木など、五六本の樹立こたちあり。沓脱くつぬぎは大戸を明けて、直ぐその通庭なる土間の一端にありて、上り口は拭ふき込みたる板敷なり。これに続ける六畳は、店と奥との中間にて、土地の方言茶の室まと呼べり。その茶の間の一方に長火鉢を据えて、

うしろ
背に竹細工の茶棚を控え、九谷焼、赤絵の茶碗、吸き子ゆうすなど、体
裁よく置きならべつ。うつむけにしたる二個ふたつの湯呑ゆのみは、夫婦別々
の好みにて、対にあらず。

細君は名をお貞ていと謂いう、年とし紀は二十一なれど、二つばかり若や
ぎたるが、この長火鉢のむこうすわに坐れり。細面にして鼻筋通り、
遠山の眉余り濃からず。生はえぎわ際少しあがりて、髪はやや薄うすけれど
も、色白くして口許くちもと緊しまり、上の気性ほせしやうと見えて唇あれたり。ほの
赤まぶたきまぶた瞼の重なげに見ゆるが、泣なきはらしたるとは風情異り、たとえば
炬燵こたつに居眠りたるが、うつとりと覚めしもののごとく涼しき眼うちの
中曇うちを帯びて、見るに倂晴おもかげやかならず、暗雲びう一帯眉宇をかすめて、
渠かれは何をか物思える。

根上りに結いたる円鬚まるまげの鬢頬びんに乱れて、下メ《したじめ》ばかり帯もメめず、田舎の夏の風俗とて、素肌すもに紺縮こんちぢみの浴衣まを纏まといつ。あながち身だしなみの悪きにあらず。

教育のある婦人おんなにあらねど、ものの本など好みて読めば、文書ふみすべつたなく術も拙つたなからで、はた裁縫わぎの業わざに長たけたり。

他の遊芸は知らずと謂う、三味線さみせんはその好きの道にて、時ありては爪弾つめびきの、忍ぶ恋路ねの音ねを立たつれど、夫は学校の教授たる、職務上の遠慮ありとて、公に弾ひくことを禁じたれば、留守の間を見計らい、細棹ほそざおの塵ちりを払はいて、慎ましげに音ね《ねじめ》をなすのみ。

お貞は今思出したらむがごとく煙管きせるを取りて、覚束おぼつか無なげに一

服吸いつ。

渠かれは煙草たばこを嗜たしなむにあらねど、憂うきを忘れ草というに頼りて、飲習わんとぞ務すむるなる、深く吸いたれば思わず咽むせて、落すがごとく煙管を棄すて、湯呑に煎茶をうつしけるが、余り沸たぎれるままその冷さむるを待てり。

時に履物の音高く家うちに入いりくるものあるにぞ、お貞は少あわし慌ただしく、急そなたに其方を見向ける時、表の戸をがたりとあけて、濡ぬれてぬぐい手拭いをぶら提げつつ、衝つと入りたる少年あり。

お貞は見るより、

「芳さんかえ。」

「奥おくさん、ただいま。」

と下駄を脱ぐ。

「大層、おめかしだね。」

「ふむ。」

と笑い捨てて少年は乱暴に二階に上るを、お貞は秋波^{ながしめ}もて追懸けつつ、

「芳ちゃん！」

「何？」

と顧みたり。

「まあ、ここへ来て、ちつとお話しなね。お祖母様^{ばあさん}はいま昼寝を
していらつしやるよ。騒々しいねえ。」

「そうかい。」

と下りて来て、長火鉢の前に突立ち、

「ああ、喉のどが渴く。」

と呷つぶやきながら、湯呑さまに冷したりし茶を見るより、無遠慮に手に取りて、

「頂戴。」

とばかりぐつと飲みぬ。

「あら！ 酷ひどいのね、この人は。折角冷しておいたものを。」

わぎと怨えんずれば少年は微笑ほほえみて、

「余ってるよ、奥様はけちだねえ。」

と湯呑を返せり。お貞は手に取りて中を覗のぞき、

「何だ、けも残しやアしない。」

と底の方に残りたるを、薬のように仰ぎ飲みつ。

「まあ、芳さんよっお坐ンな、そうしてなぜ人を、奥様々々ツて呼ぶの、嫌なこツた。」

「だって、円鬚いちようがえしに結つてるもの、銀杏返ねえさんの時は姉様だけだけれど、円鬚の時や奥様だ。」

二

お貞はハツとせし風情にて、少年の顔をみまも瞻りしが、腫はれほったき眼に思いを籠こめ、

「堪忍おしよ、それはもう芳さんが言わないでも、私はこの通り

髪も濃くないもんだから、自分でも束ねていたいと思うがね、旦那が不可いけなッて言うから仕様がなのよ。」

「だからやっぱり奥おく様じゃあないか。」

と少年は平気なり。お貞はしおれて怨うらめしげに、

「だって、他ほかの者もんなら可いいけれど、芳さんにはかりは奥様ッて謂いわれると、何だか他人がましいので、頼母たのもしくなくなるわ。せめて「お貞さん」とでも謂いっておくれだと嬉しいけれど。」

とためいきして、力なげなるものいいなり。少年は無雑作に、
「じゃあ、お貞さんか。」

と言懸かけて、

「何だか友達のように聞えるねえ。」

「だからやっぱり、姉ねえさんが可愛いじゃあないかえ。」

「でも円鬻ねえさんに結ってるもの、銀杏返だと亡なくなつた姉様ねえさんにそつくりだから、姉様だと思ふけれど、円鬻ねえさんじゃあ僕は嫌だ。」

と少年は素気そっけなし。

「じゃあまるであかの他人なの？」

「なにそうでもないけれど。……」

少年は言淀いいよどみぬ。お貞は襟かきあわを搔合せ、浴衣の上前ひつぱを引張りながら、

「それだから昨日きのうも髪を結わない前に、あんなに芳さんにあやまつたものを。邪慳じゃけんじゃあないかね。可いいよ、旦那が何といつても、叱られても大事なよ。私ひっこわやすぐ引毀して、結直して見せよう

わね。」

お貞は顔の色尋常ただならざりき。少年は少し弱りて、

「それでなくツてさえ、先達こないだのような騒さわぎがはじまるものを、そんなことをしようもんなら、それこそだ。僕アまた駈出かけだして行ゆか
にやあならない。」

「ほんとうに、あの時は。ま、どうしようと思つたわ。」

芳さんは駈出してしまつて二晩もお歸りでないし、おばあさんはまた大變に御心配遊ばしてどうしたら可よかろうとおつしやるし、旦那は旦那でもものも言わないで、黙つて考え込んでばかりいるし、ね、私はもう、面目ないやら、恥かしいやら、申訳がないやらで、ぼうツとしてしまつたよ。後で聞くと何だつさ、真まっさお蒼さおになつて

寝ていたとき。

芳さん様のあしおと跫音が聞えたので、はッと気が着いて駈出したが、それまでどうしていたんだか、まるで夢のようで、分らなかつたよ

。

少年は頻しきりに頷うなずき、

「僕はまた髯ひげがさ、（水みな上なかみさん）て呼ぶから、何だと思って二

階のぞから覗くと、姉ねえさん様は突伏つつぷして泣いてるし、髯は壇だん階ばしご子の下お

口りぐちに突つつ立つたってて、憤むっ然とした顔かお色つきで、（直ぐと明けてもらい

たい。）と失敬ことを謂うじやあないか。だから僕は不愉快たまで堪

らないから、それからそのまんまで、家うちを出て、どこか可い家が

あつたらと思つたけれど、探す時は無いもんだ。それから友達の

処へ泊つて、牛を奢つてね、トランプをして遊んでいたんだ。僕
 あ一番強いんだぜ。滅茶々に負かして悪体を吐いてやると、大
 変に怒つてね、とうとう喧嘩をしちまったもんだから、
 はそこに泊ることも出来ないの、仕方が無いから帰つて来たん
 だ。」

お貞は聞きつつ睨む真似して、

「憎らしいねえ。人の気も知らないで、お友達とトランプも無い
 もんだね。気が違やあしないかと、私や自分でそう思った位だの
 にさ。」

「でも僕あ帰つた時、（芳さん！）てつて奥から出て来た、あの
 時の顔にや吃驚したよ。暮合ではあるし、亡なつた姉さんの

幽霊かと思った。」

「いやな！ 芳さんだ。恐いことね。」

お貞は身震いして横を向きぬ。少年は微笑ほほえみたり。

「何だ、臆おくびよう病な。昼じゃあないか。」

「でもそんなことをお言いだと、晩に手水ちようずに行かれやしないや

。」

「そんなに臆病な癖にして、昨夜も髯ゆうべと二人連づれで、怪談を聞きに

行つたじゃあないか。」

お貞はまじめに弁解いいわけして、

「はい、ですから切前きりまえに帰りました。切前は茶番だの、落語だ

の、そりやどんなにかおもしろいよ。」

「それじゃもう髯の御機嫌は直ったんだね。」

三

「別に直ったというでもないけれど、まああんなものさ。あれでもね、おばあさんには大変気の毒がつてね、（お年寄がようようおちつき落着なされたものを、またお転ひっこし宅は大抵じゃアあるまいから、その内可い処があつたら、御都合次第お引越しなさるが可し、また一月でも、二月でも、家においでになつても差支えはございませんから）ツて、それツきりになつてるのよ。そのかわりね、私にや、（芳さんと談話はなしをすることは決してならない）ツて、固く

いいつけたわ。やっぱり疑ぐつているらしいよ。」

少年は火箸ひばしを手にして、ぐいぐい灰に突立てながら、不平なる顔色かおつきにて、

「一体疑ぐるツて何だろう。僕のおばあさんにもね、姉様ねえさん、髯ひげが、（お孫さんも出世前の身体からだだから、云々うんぬんが着いてはなりま
すまい。私は、私で、内の貞に気を着けますから、あなたもそこ
の処おぬかりなく。）ツさ。内証で言ったそうさ。変じやないか、
え、姉様、何を疑ぐつているんだろう。何か僕と、姉様と、不道
徳な関係があるとでもいうことなんかね、それだと失敬極まるじ
やあないか、え、姉様。」

と詰りなじ問うに、お貞は、

「ああ。」

と生返事、胸に手を置き、差俯さしうつむ向く。

少年は安からぬ思いやしけむ。

「じゃあ何だね、こないだあの騒ぎのあつた前に、二人で奥に談はな話をなししていた時、髯が戸外おもてから帰つて来たので、姉様は、あわよくつて駈出かけだしたが、そのせいなの？ 一体気が小さいから不可いけないよ。いつに限らずだ。人が、がらりと戸を開けると、何だか大変なことでも見付かつたように、どぎまぎして、ものをいうにも呼い吸きをはずまして、可訝おかしいだらうじやないか。先刻さつき僕の帰つた時も、戸をあけると、吃驚びつくりして、何だかおどおどしておいでだったぜ。こないだの時だつてもそうだ。髯に向つて、（いらつしやいまし）

自分の亭主を迎えるとして、（いらつしやいまし）なんて、言う奴があるものか。何だつてそう気が小さくツて、物驚きをするんだなあ。それだから疑ぐられるんだ。不可ねえ。」

お貞は淋しげなる微笑を含み、

「そういつてながら芳さんもあの時はやっぱりそそツかしく、二階へ駈け上つたじやあないかね。」

少年は別に考うる体もなく、

「そりや何だ、僕は何も恐いことはないけれど、あの髯が嫌だからだ。何だか虫が好かなくツて、見ると癩に障るつちやあない、

僕あもう大嫌だ。」

と臆面もなく言うて退けつ。渠は少年の血気にまかせて、後

とせき
前見ずにいいたるが、さすがにその妻の前なるに心着きけむ、
お貞の色をうかがいたり。

お貞は氣に懸けたる状もなく、かえつて同意を表するごとく、
いきおい
勢なげに歎息して、

「誰が見てもちがいはないねえ。私だつてやつぱり嫌だわ。だが
ね、芳ちゃんは、なぜ好かないの。」

少年はお貞の言の吾が意を得たるに元氣づきて、声の調子を高
めたり。

「他にね、こうといて、まだ此家へ来て、そんなに間もないこ
つたから、どこにどうという取留めたこともないけれど、ただね、
髯の様子がね、亡なつた姉様の亭主に肖ているからね、そのせい

だろうと思うんだ。」

「そうして、不可いお方だったの。」

少年はそぞろに往時を追懐すらむ、慨然としたりけるが、

「不可いどころの騒じやない、姉様を殺した奴だもの。」

お貞は太く感ぜし状にて、

「まあ。」

とそのうるみたる眼を睜りぬ。

「酷い人ね、何だツてまた姉様を殺したんだらうね。芳さんのお

姉様なら、どんなにか優しい、佳い人だったらうにさ。」

「そりや、真実に僕を可愛がってくれたツちやあないよ。今着

ている衣服なんか、台なしになつてるけれど、姉様がわざと縫つ

て寄来よこしたもんだから、大事にして着ているんだ。」

「そのせいで似合うのかねえ。」

とお貞は今更のごとく少年の可憐なる状さまぞ瞻みられける。水上芳之助は年とし紀十六、そのいう処、行う処、無邪気なれどもあどけなからず。辛苦のうちに生おいたちて浮世を知れる状見えつ。もののいいぶりはきはきして、齡よわいのわりには大人びたり。

四

要なければここには省く。少年はお蓮れんといえりし渠かれの姉が、少わかき時配偶を誤りたるため、放蕩ほうとうにして軽薄なる、その夫判事な

にがしのために虐待され、精神的に殺されて入水して果てたりし、
 一条の惨話を物語りつ。ことば語は簡に、意は深く、最もものに同情を
 表して、動かされ易きお貞をして、悲痛の涙にむせ咽ばしめたり。

語を継ぎて少年言う。

「姉ねえさん様もやっぱりひど酷いめにあわされるから、それで髯ひげが嫌なん
 だろう。」

折からぶつぶつと湯の沸にえかえ返りて、ぱつと立ちたる湯気に驚き、
 少年は慌あわただしく鉄瓶ふたの蓋を外し、お貞は身ななめを斜になりて、茶棚より
 銅あかがねの水差を取下して急がわしく水を注さしつ。

「いいえ、違うよ。私のはまた全く芳さんの姉さんとは反あちこち対で、
 あんまり深切にされるから、もう嫌で、嫌で、ならないんだわ。」

少年は太く怪しみ、

「そんな事つちやアあるもんでない。何だつて優しくされて、それで嫌だというがあるものか。」

「まあさ、お聞きなね。深切だといえは深切だが、どちらかといえは執着しつこいのだわ。かいつまんで話すがね、ちよいと聞賃をあげるから。」

と菓子皿を取とり出いだして、盛りたる羊羹ようかんに楊枝ようじを添え、

「一ツおあがり、いまお茶を入替えよう。」

と吸子の茶殻を、こぼしにあげ、

「芳ちゃんだから話すんだよ。誰にも言つちや不可いけないよ。実は私の父おとっさん親おとっさんは、中年から少し気が違つたようになって、とうとう

それでおなくなりなすつたがね、親のことをいうようだけれど、
 おつかさん
 母様は少し了簡りようけん違ちがいをして、父親おとっさんが病気のあいだに、
 私には叔父さんだ、弟ごとくつ関着くついたの。

するとお祖父じいさんのお計らいで、私が乳放れちをするとすぐに二人とも追出して、御自分で私を育てて、十三の時までお達者だったが、ああ、十四の春だった。中風ちゆうふうでお悩みなすつてから、動くことも出来なくおなりで、家は広うちし、四方は明地あきちで、穴のような処に住んでたもんだから、火事なんぞの心配はないのだけれど、盗賊どろぼうにでも入られたら、それこそどうすることもならないのよ。お金子かねも少々あつたそうだし。

雇いの婆さんは居たけれど、耳は遠いし、そんなことの助けに

やならず、祖父おじいさんの看病も私一人では覚束おぼつかなし、確たしかな後見を
といたつた処で、また後見なんていうものは、あとでよく間違が出
来るものだから、それよりか、いつそ私に……というので、親類
中で相談を極きめて、とうとうあてがったのが今の旦那旦那なの。

その頃ちようど高等中学校を卒業したので、ま、宅うちへ来てから、
東京へ出て、大学へ入ろうという相談でね、もともと内の緊しまりに
もなつてもらわなきやあならないというんでさ、わざと年の違
つたのを貰もらったもんだから、旦那は二十九で、私は十四。」
お貞は今吸子に湯をばささんとして、鉄瓶に手を懸けたる、片
手を指折りて数えみつ。

「十五の違ちがだね。もつとも晩学だとかいいうので、大抵なら二十五

六で、学士になるのが多いってね。」

「無論さ。」

と少年は傾聴しながら喙くちを容れたり。

お貞は煎茶を汲出くみいだして、まず少年に与えつつ、

「何だか知らないけれど、御婚礼をした時分は、嬉しくもなく、恐こわくもなく、まるで夢中で、何とも思やしなかったが、実はおじいさんと二人ばかりで、他所よその人の居ない方が、御膳ごぜんを頂く時やなんか、私や気が置けなくて可よかつたわ。

変に気が詰まって、他人ひとの内へ泊とまりにでも行つたようで、窮屈で、つまらなくツて、思つてみればその時分から旦那が嫌いだったかも知れないよ。でも大方甘やかされた癖で、我わが儘ままの方が勝つて

たのであろうと思う。

そのうちお祖父さんも安心をなすつたせいとか、大層気分も好よくなるし、いよいよ旦那のみが東京へたつというので、祝つてたたしたお酒の座で、ちつと飲のみようが多かつたのがもとになつてね、旦那さんが出発をしたそのおひるすぎに、お祖父様さんは果敢はかなくおなりなすつたのよ。私やもうその時は……」

とお貞は声をうるましたり。

五

「それからというもの、私はまるで気ぬけがしたようで、内の

中でも一番薄暗い、三畳の室まへ入っちやあ、どういふものだから、隅の方へちやんと坐つて、壁の方を向いて、しくしく泣くのが癖になつてね、長い間治らなかつたの。そうこうするうち兎こが出来たわ。

おかし
可笑いじゃないかねえ。」

お貞は苦々しげに打笑みたり。

「妙なものがころがり出してしまつてさ、
翌あくとし年の十月のこと
なのよ。」

と言懸けてお貞はもの案じ顔に見えたりしが、

「そうそう、芳ちゃん、まだその前さきにね、旦那だんながさ、東京へ行つて三月めから、毎月々々一枚ずつ、月の朔ついたち日にはきつと写真を

写してね、欠かさず私に送って寄来よこすんだよ。まあ、御深切様じやないかね。そのたんびに手紙がついてて、（いや今月は少し瘦やせた）の、（今度は少し眼が悪い）の、（どうだ先月と合わせて、みい、ちつとあ肥ふとって見えよう）なんて、言ことば書がきが着いてたわ。私やお祖父さんのことばかり考えて、別に何にも良人さきの事は思わないもんだから、ちよいと見たばかりで、ずんずん葛籠つづらの裡なかへしまいこんで打棄うちやつといたわ。すると、いつのことだツけか、何かの拍子、お友達にめっかってね、

（まあ！ お貞さん、旦那様は飛んだ御深切なお方だねえ。）サ酷ひどくくすぐ擦すつたもんだらうじやあないかえ。

それもそのはずだね。写真の裏に一葉ひとつ々々、お墨附があつてよ。

年、月、日、西岡時彦 これをうつす 写之、お貞殿へさ。

私もつい口惜くやし紛れに、（写真の儀はお見合せ下されたく、あまりあまり人につけても）ツき。何があまりあまりだろう、可笑おかしいね。そういつてやると、それツきりおやめになったが、十四五枚もあつた写真を、また見られちやあ困ると思つたがね、人にも遣やられず、焼くことも出来ずさ、仕方がないから、一纏まとめにして、お持仏様の奥いン処へ容れておいてよ。毎日拝んだから可いではないかね。」

先刻さきに干したる湯呑の中へ、吸子の茶の濃くなれるを、細く長くうつしこみて、ぐつと一口飲見たるが、あまり苦かりしにや湯をさしたり。

少年はただ黙して聞きぬ。

お貞は口をうるおして、

「児こが出来る、もうそのしくしく泣いてばかりいる癖はなくなつて、小児こどもにばかり気を取られて、他ほかに何にも考えることも、思うこともなくツて、ま、五歳六歳の時は知らず、そのしばらくの間ほど、苦勞のなかつた時はないよ。

すると、その夏の初はじめの頃、戸外おもてにがらがらと腕車くるまが留とまつて、入つて来た男があつたの。沓くつぬぎ脱つたに突立つたつて、案内案内もしないから、寝かし着どなたけていた坊やを置いて、私が上り口に出て行つて、

(誰方どなた、)といつて、ふいと見ると驚いたが、よくよく見ると旦那どなたのよ。旦那は旦那だが、見違えるほど瘡やせていて、ま、それ

も可いが妙な恰好かつこうさ。

大きな眼鏡のね、黒磨くろすりでもつて、眉毛から眼へかけて、頬ッ

ぺたが半分隠れようという黒眼鏡を懸けて、希代さね、何のため

だろう。それにあのそれ呼吸器とかいうものを口へ押おツつ着けてさ、

おまけに鬚ひげを生やしてるじゃあないか。それで高帽子たかじやつぽで、羽織

がというと、縞しまの透綾すきやを黒に染返したのに、五三の何か縫ぬいつけもん

で、少し丈不足たけたらずというのを着て、お召が、阿波縮あわちぢみで、浅葱あさぎの

唐縮緬とうちりめんの兵児帯へこおびを《し》めてたわ。

どうだい、芳さん、私も思わず知らず莞爾にっこりしたよ、これは帰

つて来たのが嬉しいのより、いつそその恰好おかしが可笑おかしかつたせいな

のよ。

病気で帰ったというこつたから、私も心配をして、看病をしたがね、胃病だといので、ちよいとは快よくならない。一月も二月も、そうさ、かれこれ三月ばかりもぶらぶらして、段々瘡せるもんだから、坊やは居るし、私もつい心細くなつて、そつと夜出掛けちやあお百度を踏んだのよ。するとね、その事が分つたかして、（お貞、そんなに吾おれを治したいか）ツて、私の顔を瞻みつめるからね。何の気なしで、（はい、あなたがよくなって下さいませねば、どうしましょう、私どもは路頭に立たなければなりません。）と真ま実んとうの処とをいつたのよ。

さあ怒つたの、怒らないのじゃあない。（それでは手前、活計くわしのために夫婦になつたか。そんな水臭い奴とは知らなんだ。）と

顔の色まで変えるから、私は弱ったの、何のじやない、どうしようかと思つたわ。」

六

「（なぜ一所に死ぬとは言つてくれない。愛情というものは、そんな淡々^{あわあわ}しいものではない。）ツていうのさ。向うからそう出られちゃあ、こつちで何とも言いようが無いわ。」

女郎や芸妓^{げいしや}じゃあるまいしさ、そんな殺文句が謂^いわれるものかね。でも、旦那の怒りようがひどいので、まあ、さんざあやまつてさ。坊やがかすがいで、まずそれツきりで治まったがね、私

やその時、ああ、執念深い人だと思つて、ぞツとして、それから
 というものは、何だか重荷を背負つたようで、今でも肩身が狭い
 ようなの。

あとでね、あのそら先刻さつきいつた黒眼鏡ね、（鳥蜻蛉からすとんぼ見たよう
 に、おかしいじゃありませんか。）と、病気が治つてから聞い
 たことがあつたよ。そうするとね、東京はからツ風で塵埃ほこりが酷ひどい
 から、眼を悪くせまいための砂除すなよけだつていうの、勉強盛ざかりなら洋
 燈ランプをカツカと、ともして寝ない人さえあるんだのに、そう身体からだば
 かり庇かばつてちやあ、何にも出来やしないと思つたけれど、まさか
 そんなことをいえたものでもなし、呼吸器も肺病の薬というので
 懸けるんだツて。それからね、その髻ひげがまた妙なのさ。」

とお貞は少年の面かおを見て、

「衛生髯だとき、おほほ。分るかえ？ 芳さん。」

「何のこツた、衛生髯ツたつて分らないよ。」

「それはね。」

となお微笑ほほえみながら、

「こうなのよ。何でも人間の身体からだに附属したものは、爪つめであろうが、垢あかであろうが、要らないものは一つもないとね、その中でも往來の塵埃ほこりなんぞに、肺病の虫がまぎつて、鼻はななかへ飛込むのを、髯ひげがね、つまり玄関番見たようなもので、喰留めて入れないんだツさ。見得でも何でもないけれど、身体からだのために生はしたと、そういったよ。だから衛生髯だわね。おほほほほ。」

お貞は片手を口にあてつ。少年も噴出ふきいだしぬ。

「いくら衛生のためだって、あの髯ひげだけは廃止よせば可いなあ。まるで（ちよいとこさ）に肖にてるものを、髯ひげがあるからなおそつくりだ。」

お貞は眉を打うち顰ひそめて、

「嫌だよ、芳さんは。（ちよいとこさ）はあんまりだわ。でも

（ちよいとこさ）と言いえばこないだ、小橋の上で、あの（ちよいとこさ）の飴屋あめやに逢あつたの。ちようどその時だ。桜ちゅうに中の字きの徽しゅう章しょうの着いた学校の生徒が三人連づれで、向うから行き違ちがつて、一件をを見ると声を揃そろえて、（やあ、西岡先生。）と大おお笑わらいをして行き過ぎたが、何のこつた知らんと、当座は気が着かずに居たつけ

がね。何だとき、学校じゃあ、皆みんながもう良人うちのに、（ちよいとこさ）と謂う渾名あだなを附けて、蔭かげじゃあ、そうとほか言わないそうだよ。」
少年は頭こうべを掉ふれり。

「何の、蔭かげでいうくらいなら優しいけれど、髯ひげがね、あの学校の雇やといになつて、はじめて教場へ出た時に、誰だっけか、（先生、先生の御姓名おんせいせいは？）と聞いたんだつて。するとね、ちようど、後おくれ溜たまりから入つて来た、遠藤とんどうツて、そら知つてるだろう。僕の処とこへもよく遊びに来る、肩のあがつた、武者修行ぶしあやうのような男。」

「ああ、ああ、鉄扇てつせんでものをいう人かえ。」

「うむ、彼奴あいつさ、彼奴あいつがさ。髯ひげの傍そばへずいと出て、席せきから名を尋ねた学生がくせいに向つて、（おい、君、この先生か。この先生ならそう

だ、名は チョイトコサ だ。」と謂つたので、組クラス一統がわツと
いつて笑ツたつて、里見がいつか話したつけ。」

お貞は溜ためいきをもらしたり。

「嫌になつちまう！ じゃ、まるでのつけから安く踏まれて、馬鹿にされ切つていたんだね。」

「でもなかにやああ見えても、なかなか学問が出来るんだつて、
そういつてる者もあるんだ。何なんしろ、教場へ出て来ると、礼式も
ないで、突いきなり然、ボウルドに問題を書出して、

(何番、これを。)

といつたきり椅子にかかつて、こう、少しうつむいて、肱ひじをつ
いて、黙っているツて。呼ばれた番号の奴は災難だ。大きしたげに下

稽古いこなんかして行かなかろうものなら、面くらつて、（先生私には出来ません。）といつてみても返事をしない。そのままうちやつておくもんだから、しまいにはあ泣声で、（私には出来ません、先生々々。）と呼ぶと、顔も動うごさなけりや、見向きもしないで、（遣つてみるです。）というツきりで、取とり附島も何にもないと。それでも遣つてみても出来そうもない奴は、立つたり、居たり、ボウルドの前へ出ようとして中ちゆうもどり戻もどりしたり、愚ぐ図ず々々迷まごついてる間に、柝たが鳴つて、時間が済むと、先生はそのままでファイと行つてしまふんだつて。そんな時あ問題を一つ見たばかりで、一時間まる遊び。」

七

「だから、西岡は何でも一方に超然として、考えていることがあるんだろう。えらい！　という者もあるよ。」

お貞は「何の。」という顔色かおつき。

「考えてるツて、大方内のことばかり考えてて、何をしても手が附かないでいるんだろう。聞いて御覧、芳さんが来てからは、また考えようがいつそきびしいに相違ちがないから。何だつて、またあの位、嫉妬しつと深い人もないもんだね。」

前にも談はなした通り、旦那はね、病気で帰省をしてから、それなり大学へは行ゆかないで、ただぶらぶらしていたもんだから、沢山たんと

ないお金子かねも坐食いぐいの体ていでなくなるし、とうとう先せんに居うちた家を売うつて、去々年おとしここの家へ引越したの。

それでもまあ方々から口があつて、みんな相当で、悪くもなくつて、中でも新潟県だった、師範学校のね芳さん、校長にされたのよ。校長はいいけれど、私は何だか一所に居るのが嫌だから、金沢に残ることにして、旦那ばかり、任地あつちへ行くようにという相談をしたが不可いけなくつて、とうとう新潟くんだりまで、引張ひっぱり出されたがね。どういふものか、嫌で、嫌で、片時も居たたまらなくツてよ。金沢へ帰りたい帰りたいで、例の持病で、気が滅め入いつちやあ泣ないてばかり。

旦那が学校から帰つて来て、出迎でむかえもせず俯向うつむいちやあ泣ない

てるもんだから、

(ああ、またか。)となさけなそうに言つちやあ、しおれて書齋へ入つて行つたの。別につらあてというンじやあ決してなかつたんだけれど、ほんとうに帰りたかつたんだもの。

旦那もとうとう我^がを折つて(それじやあ帰るが可い、)というお許しが出ると、直ぐに元氣づいて、はきはきして、五日ばかり御膳も頂かれなかつたものが、急に下婢^{げじよ}を呼んで、(直ぐ腕車^{くるまや}夫を見ておいで。)さ、それが夜の十時すぎだから恐しいじやあないかえ。何だか狂^{きちがい}人^{じん}じみてるねえ。

旦那を残し、坊やはその時分五歳^{いっつ}でね、それを連れて金沢^{こつち}へ帰ると、さつぱりしてその居心^よの可^よかつたつちやあない。坊もまた

大變に喜んだのさ。

それがというと、坊やも乳児ちのみの時から父おとつさん親おとつさんにやあちつとも馴染なじまないで、少しものごころが着いて来ると、顔を見ちや泣出してね。草履はを穿はいて、ちよこちよこ戸外おもてへ遊びおもてに出るようになって、情なさけないじやあないかえ。家うちへ入ろうとしちやあ、いつでもさ。外戸おもてどの隙すきみからそツと透見すきみをして、小さな口で、かあちゃん（母様、父様おとつさん）家に居いるの？）と聞くんだよ。

（ああ。）と返事へんじをすると、そのまま家へ入らないで、もの欲ほしくなつた時分ときばんでも、また遊びあそびに行つてしまつて、父様居いない、と
いうと、いそいそ入つて来ちやあ、私が針仕事はりしごとをしている肩かたへつかまつて。」

と声に力を籠めたりけるが、追愛の情の堪え難かりけむ、ぶると身を震わし、見る見る面の色激して、突然長火鉢の上に蔽われかかり、真白き雪の腕もて、少年の頸を搔抱き、

「こんな風に。」

ともものぐるわしく、真面目になりたる少年を、惚々と打まもり、

「私の顔を覗き込んじやあ、（母様）ツて、（母様）ツて呼んでよ。」

お貞は太く激しおれり。

「そうしてね、（父様）が居ないと可いねえ。ツて、いつでも、そう言ったわ。」

言懸けてうつむく時、弛ゆるき前髪まへかみの垂れけるにぞ、うるさげに搔か上きぐるとて、ようやく少年せうねんにからみたる、その腕かひなを解ほどきけるが、なお渠かれが手を握りつつ、

「そんな時ばかりじゃあないの。私わたしが何かくさくさすると、可哀こども相こどもに児こどもにあたって、叱ひつちか咤ちかツて、押入おしこへ入れておく。あとで旦那だんな

が留守くすうになると、自分でそツと押入おしこから出て来てね、そツと拔足はくそくかなんかで、私のそばへ寄よつて来きちやあ、肩越かたこに顔かほを覗のぞいて、

おおつかちゃんおつかちゃん（母はは様さま、父ちち様さまが居いないと可よいねえ）ツつさ。五い歳つや六む歳つで死しんで行い

く児こは、ほんとうに賢さとしいのね。女めの児こはまた格別かくべつ情愛じやうあいがあるものだよ。だからもう世よの中なかがつまらなくツて、つまらなくツて、仕し様がなかつたのを、児こどものせいせいで紛まれていたがね、去年こぞ（じふてり

や)で亡くなつてからは、私やもう死んでしまいたくツて堪らなかつたけれど、旦那が馬鹿におとなしくツて、かツと喧嘩するところが無いものだから、身投げに駈出す機かけだがなくなつて、ついぐずぐずで生きてたが、芳ちゃん、お前に逢つてから、私や死にたくなかつたよ。」

と、じつとその手をしめたるトタンに靴音高く戸を開けたり。

八

お貞はいかに驚きしぞ、戸のあくともろともに器械のごとく匆はね上りて、夢中に上り口に出迎いでむかえつ。蒼あおくなりて瞳を据えたる、

くつぬぎ
沓脱の処に立ちたるは、洋服扮装でたちの紳士なり。頤おとが細く、顔まろ円く、
大きき過ぎたる鼻の下に、賤いやしげなる八字髭はちじひげの上唇を蔽おほわんばかり、濃く茂れるを貯たくわへたるが、面かおとの配合あやまを過あやれり。眼まなこはいと小さく、眦まなじり垂れて、あるかなきかを怪あやしむばかり、殊に眉毛の形乱れて、墨をなすりたるごとくなるに、額には幾条の深く刻しめる皺しわあれば、實際よりは老けて見ゆべき、年とし紀は五十の前後ならむ、その顔に眼鏡を懸け、黒の高帽子を被かぶりたるは、これぞ（ちよいとこさ）という動物にて、うわさせし人の影なりける。

おつと
良夫と誤り、良夫と見て、胸は早鐘を撞つくごとき、お貞はその良人ならざるに腹立ちけむ、面おもてを赤め、瞳を据きえて、屹きとその面みまもを瞻みまもりたる、来客は帽を脱して、恭うやうやしく一礼し、左ゆんで手に提ひさげたる

革鞆かばんの中より、うち、ちいさ、とりいだ、しつ。

「日本大勝利、万歳。」

と謂いたるのみ、顔の筋をも動かさで、（ちよいとこさ）は反そ身りみになり、澄し返りて控えたり。

渠がかくのごとくなす時は、二厘三厘思い思いに、その掌たなそこに投げ遣るべき金沢市中の通とおりもの者ぎょうこうとなりおれる僥おのこ倖なるなる漢なりなりき。

「ちよいとこ、ちよいとこ、ちよいとこさ。」

と渠は、もと異様なる節を附し両手を掉ふりて躍りながら、数年
来金沢市内三百余町に飴を売りつつ往来して、十万の人一般に、

よくその面を認みられたるが、征清せいしんのことありしより、渠は活計たつきの趣向を変えつ。すなわち先のごとくにして軒ごとを見舞いあるき、怜悧れいりに米塩べいえんの料を稼ぐなりけり。

渠は常にもものいわず、極めて生真面目きまじめにして、人のその笑えるをだに見しものもあらざれども、式かたのごとき白痴者なれば、侮慢ぶまんは常に嘲笑ちようしょうとなる、世に最も賤いやしまるる者は時としては滑稽こっけいの材となりて、金沢の人士ひとは一分時の笑の代にとて、渠に二三厘を払うなり。

お貞はようやく胸を撫なでて、冷ひやかに旧もとの座に直りつ。代価は見てのお戻りなる、この滑稽劇を見物しながら、いまだ木戸銭を払わざるにぞ、(ちよいとこさ)は身動きだもせで、そのままそこ

に突立ちおれり。

ややありてお貞は心着きけむ、長火鉢の引出を明けて、渠に与うべき小銭を探すに、少年は傍より、

「姉さん、湯銭のつりがあるよ、おい。」

と板敷に投出せば、（ちよいとこさ）は手に取りて、高帽子を冠ると齊しく、威儀を正して出行きたり。

九

出行く（ちよいとこさ）を見送りて、二人は思わず眼を合しつ。
「なるほど肖ているねえ。」

とお貞は推出おしだすがごとくに言う。少年はそれには関せず。

「まあ、それからどうしたの？」

渠は聞くことに実の入りいけむ、語る人を促うながせり。

「さあその新潟から帰った当座は、坊やも——名は環たまきといつたよ

——環も元氣づいて、いそいそして、嬉しそうだし、私も日本にっぽん

晴はれがしたような心持で、病氣も何にもあつたもんじゃあないわ。

野ゆへ行く、山へ行くで、方々そとで外出をしてね、大層氣が浮いて可い

心持。

出来るもんならいつまでも旦那が居ないで、環と二人ツきり暮
したかつたわ。

だがねえ、芳さん、浮世はままにならないものとは詮じ詰めた

ことを言つたんだね。二三度旦那から手紙を寄越して、（奉公人ばかりじゃ、緊が出来ない、病気が快くなつたら直ぐ来てくれ。）と頼むようにいつて来ても、何の、彼のツて、行かないもんだから、お聞きよ、まあ、どうだろうね。行つてから三月も経たない内に、辞職をして歸つて来て、（なるほどお前なんざ、とても住めない、新潟は水が悪い）ツさ。まあ！

するとまた環がね、どういふものか、はきはきしない、嫌にいじけツちまつて、悪く人の顔色を見て、私の十四五の時見たように、隅の方へ引込んじやあ、うじうじするから、私もつい気が滅入つて、癩癩が起るたんびに、罪もないものを……」

と涙を浮かめ、お貞はがツくり俯向きたり。

「その癖、旦那は、環々ツて、まあ、どんなに可愛がったろう。頭へ手なんざ思いも寄らない、睨める真似をしたこともなかつたのに、かえつて私の方が癩癩を起しちや、（母様）と傍へ来るのを、

（ええ、も、うるさいねえ、）といつて突飛ばしてやると、旦那が、（咎とがもないものをなぜそんなことをする）てツて、私を叱るとね、（母様を叱つては嫌よ、御免なさい御免なさい）と庇かばつてくれるの。そうして、（あんな母おっかさん様は不可いけない）のう、ここへ来い）と旦那が手でも引こうもんなら、それこそ大變、わツといつて泣出したの。

（あ、あ、）と旦那が大息をして、ふいと戸外おもてへ出てしまうと、

後で、そつと私の顔を見ちやあ、さもさもどうも懐しそうに、莞に爾つこりと笑う。そのまた愛くるしさツちやあない。私も思わず莞爾して、引ツたくるように膝へのせて、しつかり抱だきしめて頬をおツつけると、嬉しそうに笑ツちやあ、（父おとつちやん様が居ないと可い）と、それまたお株を言うじやあないかえ。

だもんだから、つい私もね、何だか旦那が嫌になつたわ。でも或時いつか、

（お貞、吾おれも環にや血を分けたもんだがなあ。）とさも情なさけなそうに言ったのには、私も堪たまらなく気の毒だつたよ。

前世の敵かたき同士でもあつたものか、芳さん、環がじふてりやでなくなる時も、私がやる水は、かぶりつくようにして飲みながら、

旦那が薬を飲ませようとすると、ついと横を向いて、頭かぶりを掉ふつて、私にしがみついて、懐へ顔をかくして、いやいやをしたもんだから、ついで荒い言ことをいったこともない旦那が、何と思つたか血相を変えて、

（不孝者！）といつて、握にぎりこぶし拳いきなりで突いきなり然環をぶとうとしたから、私も屹きつとなつて、片膝立てて、

（何をするんです！）と摺寄すりよつたわ。その時の形相すさまの凄じさは、ま、どの位であつたらうと、自分でも思い遣られるよ。言いい憎にくいことだけれど、真実ほんとうにもう旦那を喰殺してやりたかつたわね。今でも旦那を環かたきの敵だと思ふもの。あの父親さえ居なけりや、何だつて環が死ぬものかね、死にやあしないわ、私ばかりの児こだつ

たら。」

お貞はしばらく黙したりき。ややあり思出したらんかのごとく、
「旦那はそのまま崩折れて、男泣きに泣いたわね。」

私やもう泣くことも忘れたようだった。ええ、芳さん、環がなくなつてから、また二三度も方々へいい役に着いたけれども、金沢なら可いが、みんな遠所とおくなので、私はどういふものか遠所へ行くとしきりに金沢が恋しくなつて、帰りたい帰りたい一心でね、濟まないことだとは思つてみても、我慢がし切れないのを、無理に堪こたえると、持病が起つて、わけもないことに泣きたくなつたり、飛んだことに腹が立ったりして、まるで夢中になるもんだから、仕方なしに帰つて来ると、旦那も後からまた帰る、何でも私をば

一人で手放しておく訳にやゆかないと見えて、始終一所に居たがるわ。

だもんだからどこも良い処には行かれないで、金沢じゃ、あんなつまらない学校へ、腰弁当というしがない役よ。」

と一人冷かに笑うたり。

十

「何もそんなに気を揉まなくツても、よさそうなものを。旦那はね、まるで留守のことが気に懸るために出世が出来ないのだ、といつても可いわ。」

そんなに私を思ってくれるもんだから、夜遊よあそびはせず、ほんのこつたよ、夫婦になつてから以来このかた、一晩も宅うちを明けたことなしさ。学校がひければ、ちゃんともう、道寄もしないで帰つて来る。もつとも無口の人だから、口じゃ何ともいわないけれど、いつもむずかしい顔を見せたことはなし、地体がくすぶつた何なんしろ、（ちよいとこさ）というのだもの。それだが、眼が小さいからちつたああれでも愛あい嬌きようがあるよ。荒い口をきいたことなし、すりや私だつて、嫌だ、嫌だというものの、どこがといっちやあ返事が出来ない。けれども嫌だから仕様がないわ。

それだから私も、なに言うことに逆らわず、良人はやつぱり良人だから、嫌だつても良人だから、良人のように謹んで事つかえてい

るもの。そう疑ぐるには及ばないじゃあないかね。芳さん、芳さんの姉ねえさん様がひどくされたようでも困るけれど、男はちったあ男らしく、たまには出歩であるき行でもしないかね、男に意気いくじ地がないようで、女房の方でも頼母たのもしくなくなるのよ。

それを旦那と来た日にやあ、ちよいとの間でも家うちに居て、私の番をしていたがるんだわ。それも私が行届かないせいだろうと、気を着けちやあいるし、それにもう私は旦那の犠いけにえ牲だとあきらめてる。分らないながらも女の道なんてことも聞いてるから、浮気らしい真似もしないけれど、芳さん、あの人の弱よわみ点だね。それがたぬに出世も出来ないなんといった日にや、私やいつそ可哀相だよ。あわれだよ。

何の密まおとこ夫の七人ぐらい、疾とつくに出来ないじゃあなかつたが：

…」

といいかけしがお貞はみずからその言過しを恥じたる色あり。

「これは話さ。」

と口軽に言消して、

「何も見張っていたからつて、しようのあるもんじやあないわね

。」

お貞は面晴おもて々しく、しおれし姿きりりとなりて、その音調も気き

競おいたり。

「しかしね、芳さん、世の中は何という無理なものだろう。ただ

式おさかずき三献をしたばかりで、夫だの、妻だのツて、妙なものが出来

上つてき。女の身体からだはまるで男のものになつて、何をいわれてもはいはいツて、従わないと、イヤ、不貞腐ふてくされだの、女の道を知らないのと、世間でいろんなことをいうよ。

折角お祖父さんが御丹精で、人並に育つたものを、ただで我ものにしてしまつて、誰も難ありがた有がりもしないじゃないか。

それでいて婦人おんなはいつも下手したでに就いて、無理も御道理ごもつともにして通さねばならないという、そんな勘定に合わないことツちやあ、あるもんじやない。どこかへ行こうといつたつて、良人がならないといえば、はい、起たてといえば、はい、寝ろといわれりやそれも、はい、だわ。

人間一人にんを縦にしようが、横にしようが、自分の好すきなままにし

ておきながら、まだ不足で、たとえば芳さんと談話はなしをすることはならぬといわれりや、やっぱり快く落着いて談話も出来ないだらうじゃないかね。

一体操を守れだの、良人に従えだのという、捉おきてかなんか知らないが、そういったようなことを極きめたのは、誰だと、まあ、お思
いだえ。

一遍婚礼をすりや疵きず者ものだの、離縁さらるのは女の恥だのツて、人
の身体からだを自由にさせないで、死ぬよりつらい思いをしても、一生
嫌そな者の傍そばについてなくツちやあならないというのは、どうい
う理窟りくつだろう、わからないじゃないかね。

まさか神様や、仏様のおつげがあつたという訳でもあるまいが

ね。もともと人間がそういうことを拵こしらえたのなら、誰だつて同おんな
 一人間じだもの、何密まおとこ夫をしても可い、駟かけ落おちをしても可いと、
 言出した処で、それが通つて、世間がみんなそうなれば、かえつ
 て貞女だの、節婦だの、というものが、爪つまはじきをされようも知
 れないわ。

旦那は、また、何の徳があつて、私を自由にするんだろう。す
 っかり自分のものにしてしまつて、私の身体からだを縛つたらうね。食
 べさしておくせいだといえ、私や一人で針仕事をして、くら
 しかねることもないわ。ねえ、芳さん、芳さんてばさ。」
 少年は太いたくこの答に窮して、一言もなく聞きたりけり。

十一

お貞はなおも語勢強く、

「ほんとに虫のいい談話はなしじやないかね、それとも私の方から、良人になつて下さいって、頼んで良人にしたものなら、そりやどんなことでも我慢が出来るし、ちつとも不足のあるもんじやあないが、私と旦那なんざ、え、芳さん、夫にした妻ではなくつて、妻にした良人だものを。何も私が小さくなつて、いうことを肯きいて縮んでゐる義理もなし、操を立てるにも及ばないじやあないか。芳さんとだつてそうだわ。何もなかをよくしたからとつて、不思議なことはないじやあないかね。こないだ騒ぎが持上つて、芳

さんがソレ駈出かけだした、あの時でも、旦那がいろいろむずかしくい
うからね、（はい、芳さんとは姉弟きょうだい分ぶんになりました。どうい
う縁ゆかりだか知らないけれど、私が銀杏いちょう返がえしに結むすっていますと、亡
なつた姉ねえさん様さんに肖にてるツて、あの児も大層姉おもいだと見えまし
て、姉様々々ツて慕こつてくれますもんですから、私もつい可愛く
なります。）と無理だとは言われないつもりで言いつたけれど、
（他人で、姉弟ていだいというがあるものか）ツて、真底まぞこから了りよう簡けんし
ないの。傍そばに居た伯父おじいさんも、伯母おばあさんも、やっぱりおんなじよ
うなことを言いつて、（ふむ、そんなことで世の中よのちうが通とるものか。
言い言いようもあるうのに、十二姉弟じふにていだい分ぶんだ。）とこうさ。口くち惜やしいじや
あないかねえ。芳さん、たとい芳さんを抱かかいて寝たからたツて、

二人さえ潔白なら、それで可いじゃあないか、旦那が何と言つたつて、私やちつとも構やしないわ。」

お貞はかく謂えりしまで、血色勝れて、元気よく、いと心強く見えたりしが、急に語調の打沈みて、

「しかしこうはいうものの、芳さん世の中というものがね、それじゃあ合がってん点しないとき。たとい芳さんと私とが、どんなに潔白であつたからつても、世間じやそうとは思つてくれず、（へん、腹合せの姉弟だ。）と一万石に極きめつちまう！ 旦那が悪いというでもなく、私と芳さんが悪いのでもなく、ただ悪いのは世間だよ。どんなに二人が潔白で、心は雪のように清くツてもね、泥足で踏みにじつて、世間で汚くしてしまふんだわ。

雪といえは御覧な、冬になつて雪が降ると、ここの家うちなんざ、裏の地面が畠はたけだからね、木戸があかなくツて困るんだよ。理窟を言えおんなじば同一で、垣根にあるだけの雪ならば、無理に推せば開あけれど、ずツとむこうの畠から一面に降りつづいて、その力が同ひ一になつて、表からおすのなもの。どうして、何といわれても、世間にやあ口が開あかないのよ。

男の腕なら知らないこと、女なんざそれを無理にこじあげよういきざれとすると、呼吸切がしてしまうの。でも芳さんは士官になるといふから、今に大将にでもおなりの時は、その力でいくらも世間を負かしてしまつて、何にも言わさないように出来ましょうけれど、今といつちやあたツた二人で、どうすることもならないのよ。

それとも神様や仏様が、私だちの手伝をして、力を添えて下さりや可いけれど、そんな願ねがいはかなわないわね。

婆ばばあ

々々じみるツて芳さんはお笑いだが、芳さんなぞはその思おもいや

遣りがあるまいけれど、可愛かわゆい児でも亡くして御覧、そりやおの
ずと後ごしよう生のことも思われるよ。

あれは、えらい僧正だつて、旦那の勧める説教を聞きはじめてから、方々へ参詣まいつたり、教おしえを聞いたりするんだがね。なるほどと思うことばかり、それでも世の中に逆らツて、それで、御利益があるツてことは、ちつとも聞かしちやあくれないものを。

戸を推おツつけてる雪のような、力の強い世の中に逆らツて行ゆこうとすると、そりや弱い方が殺されツちまうわ。そうすりやもう

死ぬより他ほかはないじゃないかね。

私ももうもう死んでしまいたいと思うけれど、それがまたそうも行ゆかないものだし、このごろじゃ芳さんという可愛いものが出来たからね、私や死ぬことは嫌になつたわ。ほんとうさ！ 自分の児が可愛いとか、芳さんとかうやつて談話はなしをするのが嬉しいとか、何でも楽たのみなことさえありや、たとい辛くツても、我慢が出来るよ。どうせ、私は意気地なしで、世間に負けているからね、そりや旦那は大事にもする、病やまい気が出るほど嫌な人でも、世間よのなかにや勝たれないから、たとい旦那が思い切つて、縁を切ろうといつてもね、どんな腹いせでも旦那にさせて、私や、あやまつて出て行ゆかない。」

と齒をくいしめてすすり泣きつ。

十二

お貞は幾年來独り思い、独り悩みて、鬱積うっせきせる胸中の煩悶はんもんの、その一片をだにかつて洩もらせしことあらざりしを、いま打明くることなれば、順序も、次第も前後して、乱れ且つ整わざるにも心着かで、再び語り続けたり。

「いっつちや女の愚痴だがね。私はさつきいったように、世の中と
いうものがあつて、自分ばかりじゃないからと、断念あきらめて、旦那
に事つかえてはいるけれど、一日に幾度となく、もうふツふツ嫌にな

ることがあるわ。

芳さんも知つておいでだ。ついこないだのことだつて、晩方旦那の友達が来たので、私もその日は朝ツから、塩梅あんばいが悪くツて、奥の室まに寝ていた処へ、推懸おしかけたもんだから、外に別に部屋はなし、ここへ出て坐つていたの。

お客がまた私の大嫌だいきらいな人で、旦那とは合口あいくちだもんだから、愉快おもしろそうに話してたツけが、私は頭痛がしていた処へ、その声を聞くとなお塩梅が悪くなつて、胸は痛む、横腹よこつばらは筋張るね、おいおい薄暗くはなつて来る。暑いといふので燈火あかりはつけずさ。陰気になつて、いろんなことを考え出して、つい堪たまらなくなつたから、横になろうと思つても、直ぐ背後うしろに居るんだもの、立膝たてひざ

も出来ないから、台所へ行つて板の間にもと思つたが、あすこ
 にや蚊かが酷ひどいし、仕方がないから戸外おもてへ出て、軒下にしやがんで
 泣いてた処へ、ちようどお前さんが来ておくれで、二階へ来いと
 おいだから、そつと上ると、まあ、おとしよりが御深切に、胸
 を押して下すつたので、私やもう難ありがた有くツて、嬉しくツて、心
 じや手を合せて拝んだわ。

おかげでやつと胸が開きそうになつて、ほつと呼吸いきをついた処
 へ、

(貞はそこに参つておりましたよな。)と、壇階だんばしご子の下へ来て、
 わざわざ旦那が呼んだじやあないかね。

私やあんまりくさくさしたから、返事もしないで黙っていると、

おばあさんがお聞きつけなすツて、

(階下へおいで、ね、ね、そうしないと悪い) ツて、みんなもう
ちゃんと推量して、やさしく言つて下さるんだもの。

(ここに居とうございます!) と、おばあ様の膝に縋りついたの。
下ではなお呼ぶもんだから、おばあさんが私のかわりに返事を
なすツて、

(可いから、可いから。) と、低声でおつしやつてね、背を撫で
て下さるもんだから、仕方なしに下りて行くと、お客はもう帰つ
ていてね、嫌な眼で睨まれたよ。

空いてる室がないもんだから、そういう時には困つちまう。ア
レ悪く取つちやあ困るわね。

何も芳さんに二階を貸しておいて、こういっっちゃあわるいけれど、はじめツからこの家は嫌いなもの。

水は悪いし、流なが元しもとなんざ湿地で、いつでもじくじくして、

心持が悪いっっちゃあない。雪どけの時分ころになると、庭が一杯水になるわ。それから春から夏へかけては李すももの樹が、毛虫で一杯。

それに宅うち中じゆう陰気でね、明けておくと往来から奥の室ままで見

透とおしだし、ここいら場末だもんだから、いや、あすこの宅はどう

したの、こうしたのと、近所中で眼を着けて、晩のお菜まで知ってるじゃあないかね。大嫌な猫がまた五六疋、野良猫が多いので、のそのそ入って、ずうずうしく上り込んで、追つてもにげるような優しいんじゃない。

隣の小猫はまた小猫で、それ井戸は隣と二軒で使うもんだから、あすこの隔へだてから入つて来ちやあ、畳でも、板の間でも、ニヤアニヤア鳴いて歩ある行くわ。

隣の猫のこツたから、あのまた女房おかみが大抵じやないのだからね、
 (家の猫うちを)なんて言われるが嫌さに、打ぶつわけにはもとよりゆ
 かず、二三度干物でも遣つたものなら、可いことにして、まつわ
 つて、からむも可いけれど、芳さん、ありや猫の疱瘡ほうそうとでもい
 うのかしら。からだじゆう一杯のできもので、一々膿うみをもつて、
 まるで、毛が抜けて、肉があらわれてね、汚なくつて手もつけら
 れないよ。それがさ、昨夜ゆうべも蚊帳かやの中へ入込んで、寝ていた足を
 なめたのよ。何の因果だか、もうもう猫にまで取とツツかされる。」

と投ぐるがごとく言いすてつ。
 苦にが笑わらいして眩つぶやきたり。

「ほんとうに泣なくより笑わらいだねえ。」

十三

お貞ことばの言途絶えたる時、先刻さつきより一言ひとことも、ものいわで渠かれが物語を味いつつ、是非の分別にさまよえりしごとき芳之助の、何思いけん呵から々と笑い出して、

「ははは、姉ねえさん様は陰弁慶だ。」

お貞は意外なる顔かおつき色にて、

「芳さん、何が陰弁慶だね。」

「だつてそんなに決心をしていながら、一体僕の分らないというのはね、人ががらりと戸を明けると、眼に着くほどびっくりして、どきり！　する様子が確たしかに見えるのは、どういふものだろう。髯ひげの留守に僕と談話はなしでもしている処へ唐突だしぬけに戸外おもてがあければ、いま姉様がいった世間よのなかの何とかで、吃驚びっくりしないにも限らないが、こうしてみるに、なにもその時にや限らないようだ。いつでもそうだから可笑おかしいじゃないか。それに姉様のは口でいうと反対で、髯ひげの前じゃおどおどして、何だか無暗むやみに小さくなつて、一言ものをいわれても、はツと呼吸いきのつまるように、おびえ切っている癖に。今僕に話すようじゃ、酸いも、甘いも、知つていて、旦那さんを三二銭さんもんとも思つてやしない。僕が二厘の湯銭の剩銭つりで、（ちよい

とこき)を追返したよりは、なお酷く安くしてるんだ。その癖、世間じゃ、(西村の奥様は感心だ。今時の人のようでない。まるで嫁にきたてのように、旦那様を大事にする。婦人はああ行かなければ嘘だ。貞女の鑑だ。しかし西村には惜いものだ。)なんとそう言ってるぞ。そうすりや世間も恐しくはなかるうに、何だつて、あんなにびくびくするのかなあ。だから姉様は陰弁慶だ。」

と罪もなくけなしたるを、お貞は聞きつつ微笑みたりしが、ふと立ちて店に出で行き、往来の左右を視め、旧の座に降りて四辺を、し、また板敷に伸上りて、裏庭より勝手などを、巨細に見て座に就きつ。

「それはね、芳さん、こうなのよ。」

という声もハヤふるえたり。

「芳さんだと思つて話すのだから、そう思つて聞いておくれ。」

私はね、可いかい。そのつもりで聞いておくれ。私はね、いつごろからという確なたしかことは知らないけれど、いろんな事が重り重りかさなりしてね、旦那が、旦那が、どうにかして。

死んでくれりやいい。死んでくれりやいい。死ねばいい。死ねばいい。

とそう思うようになったんだよ。ああ、罪の深い、呪のろうのも同おんなじ一だ。親の敵かたきでもあることか、人並より私を思つてくれるものを、（死んでくれりやいい）と思うのは、どうした心得違いだらうと、自分で自分を叱つてみても、やっぱりどうしてもそう

思うの。

その念おもいが段々こう嵩じて、朝から晩まで、寝てからも同おんなじ一ことことを考えてて、どうしてもその了りようけん簡かんがなならないで、後暗いことおもしろいはないけれど、何なんに着け、彼かに着け、ちよつとの間もその念おもいが離れやしない。始終そればかりが気にかかつて、何をしても手に着かないしね、じつと考えこんでいる時なんざ、なおのこと、何にも思わないでその事ばかり。ああ、人の妻の身で、何たる恐しい了簡だろうと、心の鬼に責められちやあ、片時も気がやすまらないで、始終胸がどきどきする。

それがというと、私の胸にあることを、人に見付かりやしまいかと、そう思うから恐怖こわいんだよ。

わけても、旦那に顔を見られるたびに、あの眼が、何だか腹の中まで見透す^{みすか}ようでおどおどしずにやいられない。(貞) ツて一声呼ばれると、直ぐその、あとの句が、(お前、吾^{おれ}の死ぬのが待遠いだろう。)とこう来るだろうと思うから、はツとしないじやいられないわね。それで何ぞ外のことを言われると、ほツと気が休まつて、その嬉しさつちやないもんだから、用でも、何でもいそいそする。

それにこうやつて、ここへ坐つて、一人でものを考えてる時は、頭の中で、ぐるぐるぐるぐる、(死ねば可い)という、鬼か、蛇^{じゃ}か、何ともいわれない可^{こわい}恐ものが、私の眼にも見えるように、眼^め前に^{さき}駈^{かけ}まわっているもんだから、自分ながら恐しくツて、観音様

を念じているの。そこへがらりと戸を開けられちやあ、どうして慌てずにいられよう。（ああ、めツかった。）と、もう死んだ気になっちまう！

それが心配で、心配で、どうぞして忘れたいと思うから、けないことにわあわあ騒いだり、笑ったり、他所よそめには、さも面白そうに見えようけれど、自分じゃ泣きたいよ。あとではなおさら気がめいって、ただしよんぼりと考え込むと、また、いつもの（死ねばいい）が見えるようなの。

恐しくツてたまらないから、どうぞこの念がなくなりますようにと、観音様に願っても、罪が深いせいなのか、段々強くなるばかり。

気のせいかわからないけれど、旦那は日に日に血色が悪くなつて、次第に弱つて行く様子、こりや思いが届くのかと考えると、私やもう居ても起たつても堪たまらない。

だから旦那が煩いでもすると、ハツと思つて、こりやどうでも治なさないと、私が呪のろい殺すのだと、もうもうさほどでもない病氣でも、夜よの目も寝ないで介抱するが、お医者様のお薬でも、私の手から飲ませると、かえつて毒になるようで、何でも半日ばかりの間は、今にも薬の毒がまわつて、血でも吐きやしないかしらと、どうしてその間の心配というものは！ でもそれでもやっぱり考かんえることといつたら、ちつとも違ちがはない、（死ねば可い。）で、早くなおつて欲しいのは、実は（死ねば可い。）と思うからだよ。

ねえ、芳さん分つたろう。もう胸が一杯で、口も利かれやしな
いから、後生だ、推量しておくれ。も、私や、私はもう芳さんど
うしたら可いんだねえ。」

と身を震わしたるいじらしさ！

お貞がこの衷情ちゆうじょうに、少年は太く動かされつ。思わず暗涙なみだを
催したり。

「ああ姉様は可哀そうだねえ。僕が、僕が、僕が、どうかしてあ
げようから、姉さん死んじやあ不可いけないよ。」

お貞は聞きて嬉しげに少年の手をじつと取りて、

「嬉しいねえ。何の自害なんかするもんかね、世間と、旦那とし
て私をこんなにいじめめるもの。いじめ殺されて負けちや卑怯ひきょうよ。

意気地が無いわ。可いよ、そんな心配は要らないよ。私や面^{つら}あてにでも、活^いきている。たといこの上幾十倍のつらい悲しいことがあつても、きつと堪^{こら}えて死にやあしないわ。と心強くはいつても、死なれないのが因果なのだねえ。」

ほろりとして見る少年の眼にも涙を湛^{たた}えたり。時に二階より老女の声。

「芳や、帰つたの。」

「あれ、おばあさんが。」

「はい、唯^{ただいま}今。」

十四

二段ばかり少年は壇階子だんばしごを昇り懸けて、と顧みて驚きぬ。時彦は帰宅して、はや上あがりぐち口の処に立てり。

我が座を立ちしと同時ならむ。と思うも見るもまたたくま、さそくの機転、下を覗のぞきて、

「もう、奥様おくさん、何時なんどきです。」

「は。」

とお貞は起たちたるが、不意に顛倒てんどうして、起ちつ、居つ。うろあたりうろ四辺を見廻ひます間に、時彦は土間に立ちたるまま、肅然として帯の間より、懐中時計を取とり出いだし、丁寧うちながに打視めて、少年を仰ぎ見んともせず、

「五十九分前六時です。」

「はばかりさま憚様。」

と少年はあしおと登音高く二階に上れり。

時彦は時計を納めつ。立ちも上らず、坐りも果てざる、妻に向むかいて、沈める音調、

「貞、床を取つてくれ、気分が悪いじや。貞、床をとつてくれ、気分が悪いじや。」

おもて面は死灰のごとくなりき。

十五

時彦はその時よりまた起たたず、肺結核の患者は夏を過ぎて病勢
 募り、秋の末つ方に到りては、恢かい復ふくの望のぞ絶果みてぬ。その間お貞
 が尽したる看護の深切は、實際隣人を動かすに足るものなりき。

渠かれは良人の容体の危篤に陥りしより、ほとんど一月ばかりの間
 帯を解きて寝しことあらず、分けてこのごろに到りては、一七いちしち

日にちいまだかつて瞼まぶたを合さず、渠は茶を断ちて神に祈れり。塩を

断ちて仏に請えり。しかれども時彦を嫌悪の極、その死の速すみかな

らんことを欲する念は、良人に薬を勧むる時も、その疼とう痛つうの局

部さすを擦ひまる隙も、須臾しゆゆも念頭を去りやらず。甚しいかなその念の深

く刻めるや、おのが幾年の寿命を縮め、身をもて神仏の贄にえに供え

て、合掌し、瞑めい目もくして、良人の本復を祈る時も、その死を欲す

るの念は依然として信仰の靈を妨げたり。

良人の衰弱は日に著しるけきに、こは皆おのが一念よりぞと、深更四隣静まりて、天地沈々、病者のために洋燈ランプを廃して行燈あんどんにかえたる影暗く、隙間すきまもる風もあらざるにぞ、そよとも動かぬ灯影ほかげにすかして、その寂じやくたること死せるがごとき、病者の面をそと視ながめて、お貞は顔を背けつつ、頤おとがい深く襟うずに埋めば、時彦の死を欲する念、ここぞと熾さかんに燃立ちて、ほとんど我を制するあたわず。そがなすままに委まかしおけば、奇異なる幻影眼前めさきにちらつき、※ぼっと火花の散るごとく、良人の膚はだを犯すごとに、太く絶え、細く続き、長く幽かすけき呻吟うめきこえ声の、お貞の耳を貫くにぞ、あれよあれよとばかりに自ら恐れ、自ら悼いたみ、且つ泣き、且つ怒いかり、且つ悔いて、

ほとんどその身を忘るる時、

「お貞。」

と一ひとこえ声、時彦は、鬱うつし沈める音調もて、枕も上げで名を呼びぬ。

この一声を聞くとともに、一ひとおけ桶の氷を浴びたるごとく、全身の血は冷却して、お貞は、

「はい。」

おののと戦きたり。

時彦はいともしずかの静に、

「お前、このごろから茶を断ツたな。」

「いえ、何もあなた貴下、そんなことを。」

と幽かにいいて胸をおさえぬ。

時彦はおとが頤のあたりまで、夜着の襟深く、あおむけ仰向に枕して、まぼそ眼細

く天井を仰ぎながら、

「しおだち塩断もしてようだ。一おととい昨日あたりから飯も食べないが、一

体りょうけんどういう了簡じゃ。」

(貴下を直したいために)といわんは、渠の良心の許さざりけむ、
差俯さしうつむ向きてお貞は黙しぬ。

「あかりが暗い、かきた搔立てるが可い。お前ひどが酷く瘠やせツこけて、そ
うしよんぼりとしてる処は、どう見ても幽霊のようじゃ、行燈が
暗いせいだろう。な。」

「はい。」

お貞は、深夜幽霊の名を聞きて、ちりけもとより寒さを感じつ。身震いしながら、少しく居寄りて、燈心の火を掻立てたり。

「そんなに身体からだを弱らせてどうしようという了簡なんか。うむ、お貞。」

根深く問うに包みおおせず、お貞はいとも小さき声にて、

「よく御存じでございます。」

「むむ、お前のすることは一々吾おや知つとるぞ。」

「え。」

とお貞はさがずり退りぬ。

「茶断ちやだち、塩断しおだちまでしてくれるのに、吾おれはなぜ早く死なんのか

な。」

お貞は聞きて 興きよう覚ざめ顔がおなり。

時彦の語気は落着けり。

「疾はやく死ねば可いと思つておつて、なぜそんな真似をするんだな

」。

と声に笑いを含めて謂いえり。お貞はほとんど狂せんとせり。

病者はなおも和やわかに、

「何、そう驚くにや及ばない。昨日今日にはじまつたことではな

いが、お貞、お前は思つたより遙はるかに恐おそしい女おんなだな。あれは憎にくい、

憎い奴だから殺したいということなら、吾おれも了簡りょうかんのしようがある

が、（死んでくれりや可い。）は実に残酷さだめだ。人を殺せば自分も

死なねばならぬというまず世の中に定規さだめがあるから、我身わがみを投出

して、つまり自分が死んでかかって、そうしてその憎い奴を殺すのじゃ。誰一人生命いのちを惜まぬものはない、生きていたいというのが人間第一の目的じゃから、その生命いのちを打棄ててかかるものは、もう望のぞみを絶つたもので、こりや、隣あわれむべきものである。

お前のはそうじゃあない。(死んでくれりや可い)と思うので、つまり精神的に人を殺して、何の報むくいも受けないで、白日青天、嫌な者が自分の思いで死んでしまった後は、それこそ自由自在の身じゃでの、仕たい三昧ざんまい、一人で勝手に栄耀えいようをして、世を愉快おもしろく送ろうとか、好すきな芳之助と好いいことをしようとか、怪けしからんことを思っている、つまり希望というものがお前にあるのだ。

人の死ぬのを祈りながら、あとあとの楽たのしみを思っている、そん

な太い奴があるもんか。

おれ吾はきつと許さんぞ。

そうそうすき好なまねをお前にされて、吾も男だ、指をくわ啣えて死にはしない。

といつも思っていたんだが、もうこの肺病には勝たれない、いや、つまり、お前に負けたのだ。

してみれば、お貞、お前が呪のろい詛殺すんだと、吾がそう思つても、仕方があるまい。

吾はどのみち助からないと、初手あきらツから断念めてるが、お貞、お前の望がか叶うて、後で天下ぼれたのし晴に楽まれるのは、吾はどうしても断念められない。

謂うと何だか、女々しいようだが、報のない罪をし遂げて、あとで楽たのしみをしようという、虫の可いことは決して無い。またそうさせるような吾でもない。

お貞、謝罪わびをしちやあ可いかんど。お前は何も謝罪をすることもなし、吾も別に謝罪を聞く必要も認めんじや。悪かつたというて謝罪をすればそれで済む、謝罪を聞けば了簡すると、そんな気楽なことを思うと、吾のいうことが分るまいでな。何でもしたことには、それ相当の報酬むくいというものが、多くもなく、少なくともなく、ちように可いほどあるものだ、そう思つてろ！ 可いか、お貞、

……お貞。」

と少し急せぎ込みて、絶え入るばかりに咽むせびつつ、しばらく苦痛

を忍びしが、がらがらと血を吐きたり。

いつもかかるとのことのある際には、ひとかたな一 刀浴びたるごとく、あお蒼

くなりてすが継り寄りし、お貞は身みうごき動だもなし得ざりき。

病者は自ら胸をいだ抱きて、まなこねむ眼を瞑ること良久ひさしかりし、ひときわ一 際声
のから嗚びつつ、

「こう謂えばな、親をけころ蹴殺した罪人でも、一応は言訳をすること
が出来るものと、お前は無念に思うであろうが、法廷で論ずる
罪は、囚徒が責任を負つてるのだ。

今お前が言訳をして、今日からどんな優しい気になろうとも、
とても助からない吾に取つては、何の利益も無いことで、死んで
しまえば、それ、お前は日本晴で、可いことをしてたのし楽むんじや。

そううまくはきつとさせない。言訳がましいことを謂うな。聞く
 ような吾でもなし。またお前だつてそうだ。人ひとごろし殺ころよりなおひ
 どい、（死んでくれれば可い）と思うほどの度胸のある婦人おんなでな
 いか。しつかりとしろ！ うむ、お貞。」

お貞は屹きつと顔を上げて、

「はい、決して申訳はいたしません。」

といと潔よく言放てる、両の瞳の曇は晴れつ。旭きよつこう 光 一射霜
 を払いて、水仙たちまち凜りんとせり。

病者は心地好よげに領うなずきぬ。

「可よし、よく聞け、お貞。人の死ぬのを一日待に待ち殺して、あ
 とでよい眼を見ようというはずるいことだ。考えてみる。お前は

今までに人情の上から吾に数え切れない借があるう。それをな、その負債をな。今吾に返すんだ。吾はどうしても取ろうというのだ。」

いと恐しき声にもおじず、お貞は一膝乗のりい出して、看病疲れに繕わざる、乱れし衣紋えもんを繕いながら、胸を張りて、面おもてを差向け、

「旦那、どうして返すんです。」

「離縁しよう。いまここで、この場から離縁しよう。死にかかつている吾を見棄てて、芳之助と手を曳ひいて、温泉へでも湯治に行ゆけ。だがな、お前は家附の娘だから、出て行くゆことが出来ぬと謂えば、ナニ出て行くには及ばんから、床ずれがして寝返りも出来ない、この吾を、芳之助と二人で負おぶつて行って、姨捨山おぼすてやまへ捨て

るんだ。さ、どちらでも構わない。ただ、（人の妻たる者が、死にかかつてる良人を見棄てた。）とこういうことが世間へ知れて、世の中の者がみんなその気でお前に附合えば、それで可い、それで可い。ちつとは負債が返せるのだ。

しかし、これはお前には出来ぬこつた。お前は世間体というものを知ってるから、平生、吾が健全たっしやな時でも、そんな事は暖おくびにも出さないほどだ。それが出来るくらいなら、もう疾とつくに離別わかれてしまったに違いない。うむ、お貞、どうだ、それとも見棄てて、離縁が出来るか。」

お貞は一思案にも及ばずして、

「はい、そんなことは出来ません。」

病者はさもこそと思える状なり。さま

「それではお貞、お前の念いおもで死なないうちに、……吾を殺せ。おれ」
しずかと静にいう。

「え、貴下あなたを！」

「うむ、吾を。おれ お貞、ずるい根性を出さないで、表おもてむき向むかに吾を殺して、公然、良人殺しの罪人になるのだ。お貞、良人殺ころしの罪人になるのだ。うむお貞。

吾を見棄てるか、吾を殺すか、うむ、どちらにするな。何でも負債を返さないでは、あんまり冥利みょうりが悪いでないか。いや、ないかどころでない！ そうしなけりや許さんのだ。うむ、お貞、どっちにする、殺さないと、離縁にする！」

といと嚴おごかに命いのちじける。お貞は決する色ありて、

「貴あなた下、そ、そんなことを、私にいつてもいいほどのことがある
んですか。」

声ふるわして屹きつと問いぬ。

「うむ、ある。」

と確かっこ乎として、謂う時病者は傲ごうぜん然ぜんたりき。

お貞はかの女が時々神経に異変を来きたして、頭かしらあたかも破わるるが
ごとく、足はわななき、手はふるえ、満面あお蒼おくなりながら、身しん火か
烈々からだ身体を焼きて、恍ことうとして、茫ぼうとして、ほとんど無意識に、さ
れど深長なる意味ありて存するごとく、満身の氣まなこを眼まなこにこめて、
その瞳をも動かさで、じつと人を目詰みつむれば他をして身の毛をよ

だたすことある、その時と同一容おなじありさま体にて、目まじろぎもせで、
 死せるがごとき時彦の顔をみまも瞻りしが、俄然がぜん、崩折くずおれて、ぶるぶる
 と身震いして、飛着くごとく良人にすが縊りて、血を吐く一声夜陰を
 貫き、

「殺します、旦那、私はもう……」

とわつとばかりに泣出しぎま、擲なげうたれたらんかのごとく、障子
 とともにたお僵れ出でて、衝つと行き、勝手許もとの暗やみを探りて、渠かれは得物
 を手にしたり。

時彦ははじめのごとく顔の半ばに夜具を被かつぎ、仰向あおもむけに寝て天
 井を眺めたるまま、此方こなたを見向かんともなさずして、いと静しずかに、
ひやや冷かに、着物の袖も動かさざりき。

諸君、他日もし北陸に旅行して、ついでありて金沢を過りたまわん時、好事の方々心あらば、通りがかりの市人に就きて、化銀杏の旅店？と問われよ。老となく、少となく、皆直ちに首肯して、その道筋を教え申さむ。すなわち行きて一泊して、就褥の後に御注意あれ。

間広き旅店の客少なく、夜半の鐘声森として、凄風一陣身に染む時、長き廊下の最端に、燈然たる足音あり寂寞を破り近着き来りて、黒きもの颯とうつる障子の外なる幻影の、諸君の寢息を覗うあらむ。その時声を立てられな。もし咳をだにしたまわば、怪しき幻影は直ちに去るべし。忍びて様子をうかがいたまわば、すツと障子をあくると共に、銀杏返の背向に、あ

とあし下りに入り来りて、諸君の枕まくら辺へに近づくべし。その瞬時
 真白なる細き面影を一見して、思わずしやうぜん悚然しんぜんとしたまわんか。
 トタンに件くだんの幽霊は行燈あんどんの火を吹消ふつけして、暗中を走るあしおと登音あしおと、
 遠く、遠く、遠くなりつつ、長き廊下の尽頭はすれに至りて、そのまま
 ハタと留やむべきなり。

夜よはいよいよ更けて、風寒かぜきに、怪者の再来おもんばかを慮りて、諸君は
 一夜を待明かきむ。

明くるを待ちて主翁あるじに会し、就きて昨夜の奇怪を問われよ。主
 翁は黙して語らざるべし。再び聞かれよ、強いられよ、なお強い
 られよ。主翁は拒むことあたわずして、愁しゆうぜん然ぜんとしてその実を
 語るべきなり。

聞くのみにてはあき足らざらんか、主翁に請いて一室ひとまに行け。

密閉したる暗室内に俯向うつむき伏したる銀杏返の、その背と、裳もすその動かずして、あたかもなきがらのごとくなるを、ソト戸の透すきより見るを得うべし。これ蓋けだし狂者の挙動なればとて、公判廷より許されし、良人を殺せし貞婦にして、旅店の主翁はその伯父なり。

されど室内に立入りて、その面おもてを見んとせらるるとも、主翁は頑がえんとして肯がえんぜざるべし。諸君涙あらば強うるなかれ。いかんとなれば、狂せるお貞は爾来世じらいの人に良人殺しの面を見られんを恥じて、長くこの暗室内に自らその身を封じたるものなればなり。渠かれは恐懼おそれて日光を見ず、もし強いて戸を開きて光明その膚はだえに一注せば、渠は立たちどころ処ちこに絶して万事休やまむ。

光を厭いとうことかくのごとし。されば深更いちる一縷ともの燈火しびをもお貞は恐れて吹消ふっけし去るなり。

渠はしかく活いきながら暗中に葬り去られつ。良人を殺せし妻ながら、諸君請じよう恕せられよ。あえて日光をあびせてもてこの憐むべき貞婦を射殺いころすなかれ。しかれどもその姿をのみ見て面を見ざる、諸君はさぞ本意ほいなからむ。さりながら、諸君より十層二十層、なお幾十層、ここに本意なき少年あり。渠は活きたるお貞よりもむしろその姉の幽霊を見んと欲して、なお且つしかするを得ざるものをや。

明治二十九（一八九六）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成²」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二卷」岩波書店

1942（昭和17）年9月30日発行

初出：「文芸倶楽部」

1896（明治29）年2月

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年7月3日作成

2012年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

化銀杏

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>